

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



mico tama

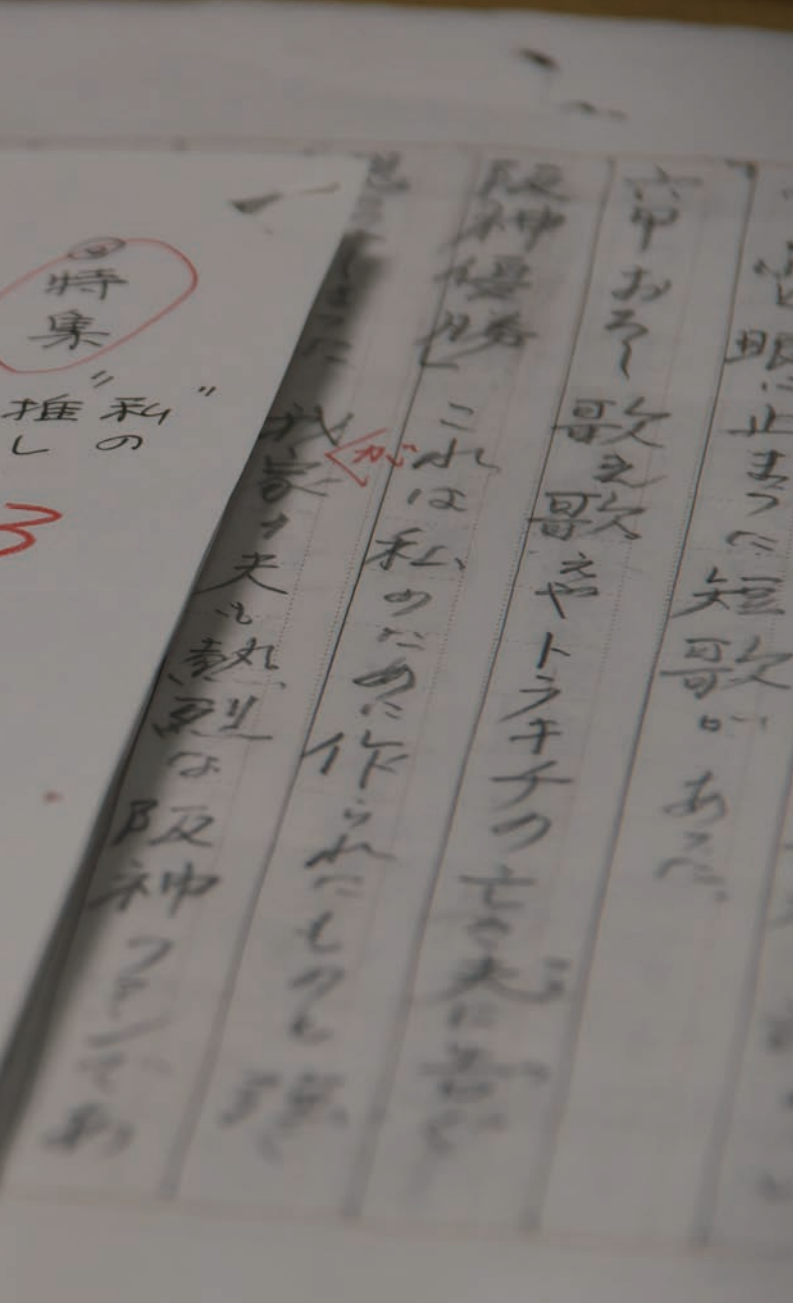
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2025 第9号

**TAKE
FREE**

八王子に生きる

八王子を綴る、ふだん記を追う
織物をつなぐ
南多摩のメカイ製作技術 後編
狭間地域巡検記
「当たり前」のありがたさを後世に繋ぐ





表紙写真

狭間町、御嶽神社にて。
五穀豊穡や厄除けとして受け継がれてきた狭間の獅子舞が奉納される。

(2024年8月18日)

本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館（帝京大学八王子キャンパス内）で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。

本誌の企画・取材・執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心に行っています。また、本号は八王子市郷土資料館を中核館とする文化庁 Innovate MUSEUM 事業地域課題対応支援事業「共創で紡ぐ、^{もよう}多摩・八王子の歴史文化継承と博物館機能強化事業」の助成を受け発行しております。

帝京大学総合博物館について

本館は2015年9月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト: <https://teikyo.jp/museum/>
- X(旧:Twitter) (@Teikyo_Museum): https://twitter.com/Teikyo_Museum
- Instagram (@teikyo_museum): https://instagram.com/teikyo_museum/
- YouTube: https://youtube.com/channel/UCFAxF_

Contents

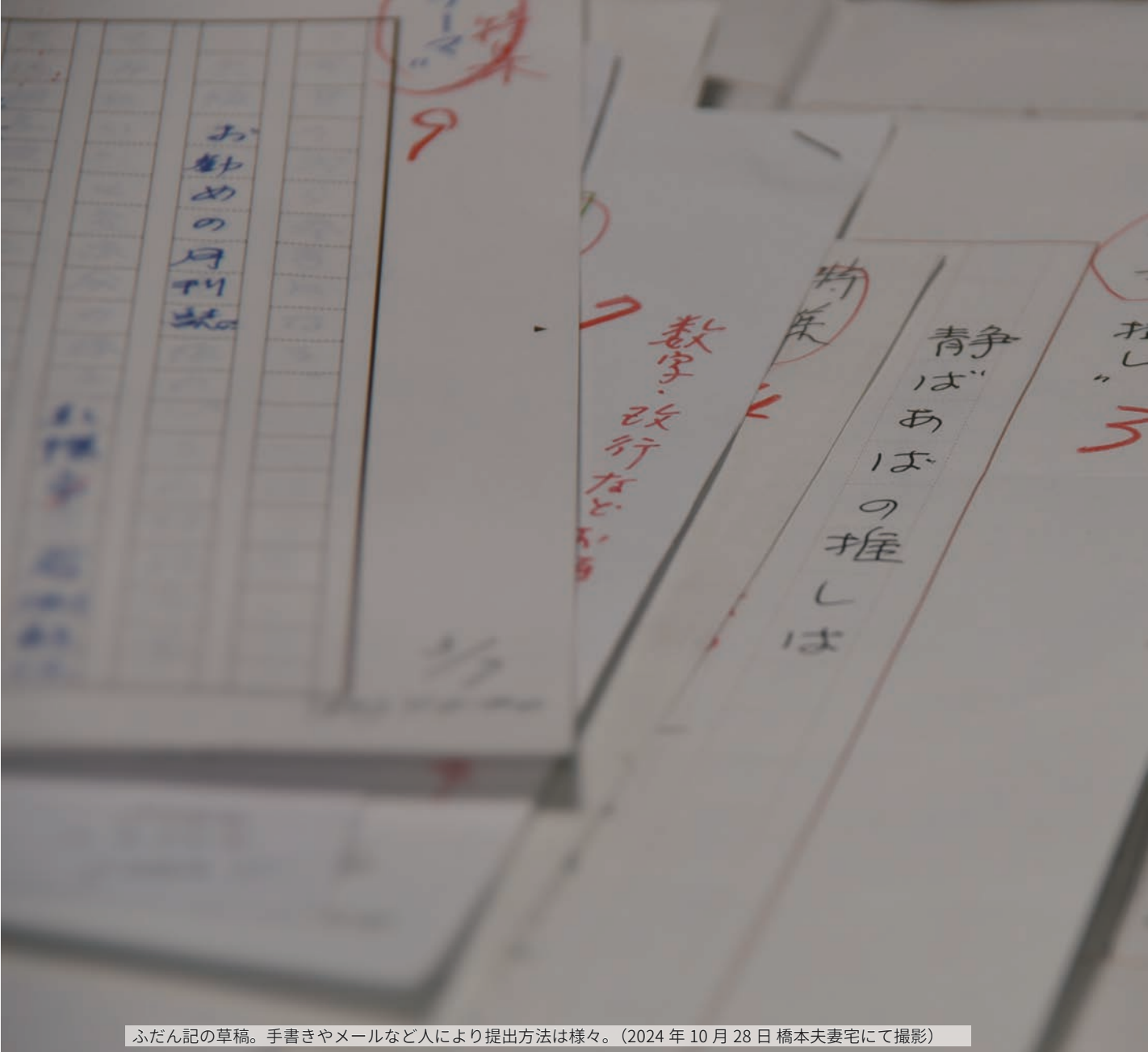
キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2025 第9号

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ (Mico) と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力の本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。




ふだん記の草稿。手書きやメールなど人により提出方法は様々。(2024年10月28日 橋本夫妻宅にて撮影)


特集 八王子に生きる

- 8 八王子を綴る、
ふだん記を追う
- 11 織物をつなぐ
―その原動力とは―
- 14 南多摩のメカイ製作技術 後編
- 18 狭間地域巡検記
- 22 「当たり前前」のありがたさを
後世に繋ぐ
―養蚕がもたらすもの―
- 28 文化の繋ぎ手としての博物館
〈八王子市郷土資料館の役割〉
- 30 ミコタマ通信
- 31 編集後記

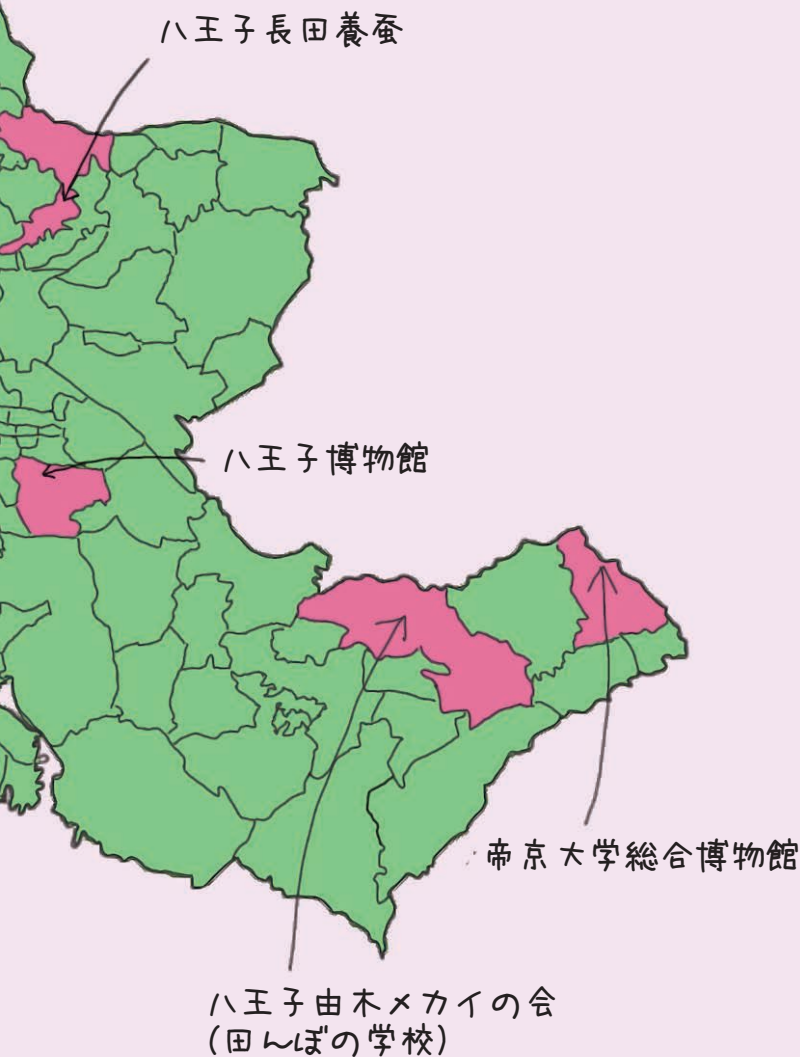


 八王子由木メカイの会
堀之内



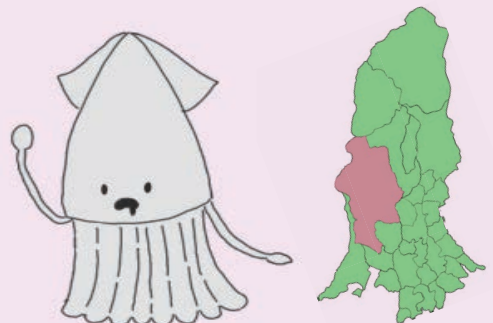
 八王子長田養蚕
滝山町

八王子市の地図



織物

子安町 (八王子博物館)
千人町 (東京都立八王子桑志高校)



▲ミコイカ。ミコタマのキャラクター。
多摩地域 (右図) の形がモチーフ。



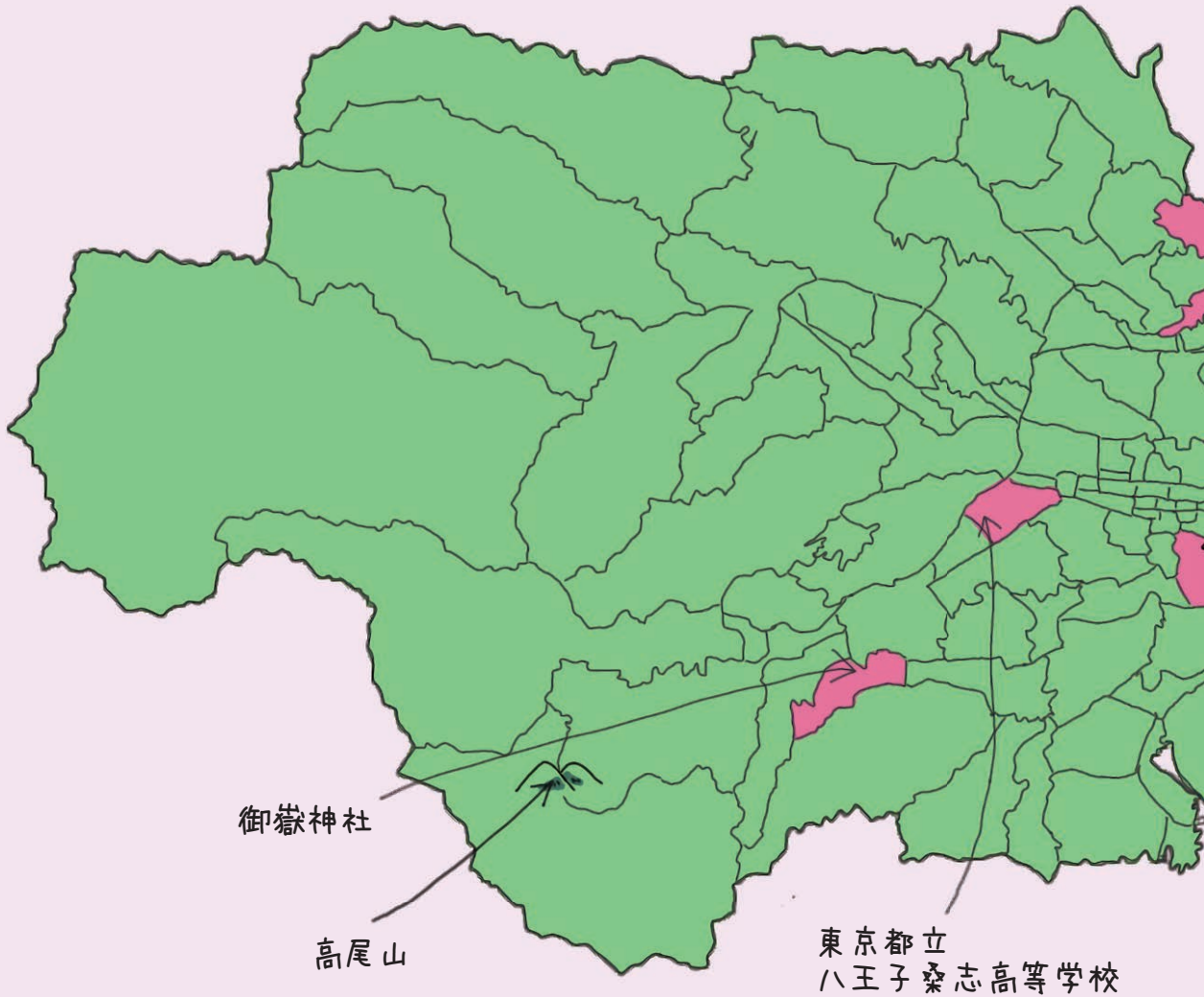
ふだん記

子安町（八王子博物館）
橋本鋼二さん・緑さんのお宅



狭間の獅子舞

狭間町



今号の取材マップ

※地理院地図（国土地理院）を加工して作成

特集

八王子に生きる

八王子は、都心部から少し離れた、多摩の南部に位置する非常に大きな街で、約56万人の人口を抱えています。

多くの人がこの街で生活し、様々な文化を伝えてきました。

今回私たちは、八王子市郷土資料館の全面的な協力のもと、

八王子にクローズアップした特集を組むこととなりました。

私たちが普段活動している帝京大学も位置している八王子。


高尾山を望むこの街に一步足を踏み入れてみると、八王子を

桑都と言わしめた豊かな歴史と、昔ながらの人情に溢れた、

美しい景色がそこかしこに広がっていました。



高尾山から望む八王子市街地(2024年12月20日撮影)



八王子を綴る、 ふだん記を追う

▲橋本さん宅へ集まるふだん記の原稿。緑さんが校正を行う

戦後日本、高度経済成長期真っ只中の東京において、八王子市では住宅団地や工業団地の開発が進み、大きく栄えた。多くの人が八王子の街で暮らし日本経済を支え、今の姿まで発展してきた。

このような歴史を持つ八王子で、1968年、橋本義夫はしもとよしおという人物が一つの文化運動を始めた。参加は自由、何を書くのも自由、詩歌でも日記でもエッセイでもない新しい形の文章、「ふだん記」。「下手でいい」庶民の言葉を本にして後世に残す」という橋本義夫のモットーと共に八王子で生まれたふだん記運動は、その後北海道から九州まで日本各地に広がった。最盛期と比べて規模は小さくなったものの、今なお人々の心を惹きつけている。

橋本義夫という男

1968年、ふだん記の活動はそこから始まった。創始者の橋本義夫は1902年に八王子で生まれた。

彼については数多の書籍や記録によって綴られているため、ここでは割愛する。それらの文献によれば、彼が沢山のの人に慕われ、また多くの人と対立しながら生きた社会運動家、かつ文学者であることは間違いない。私は橋本義夫のことをもっと知るため、八王子市郷土資料館の紹介で、ふだん記の活動に定期的に参加している、94歳の山本千枝子やまもとちえこさんにお話を伺った。

山本さんは非常に快活で、芯の通った方だった。彼女が橋本義夫を語るその目には、少女が持つような憧れと親しみが込められており、それだけでも橋本義夫の人柄をうかがえた。

「橋本さんはだれが何といっても自分の意志を曲げない、自分らしくという生き方をした人。恥をかかされたり虐げられたりしながらもそういう状況の中で自分を開拓した人」橋本義夫の人物像をこう語った。

山本さんは生きてきた中で、大き



▲ふだん記への思いを語る山本さん

な後悔をすることが何度かあったそう。後悔を橋本義夫に吐露した際「自分が気づいて悪いと思ったらすぐに謝りなさい。それが一番だよ」という言葉をかけてもらったという。「橋本義夫を通して学びを得て、自分と向き合うことができた」と話してくれた。山本さんの生き方の核の部分に、橋本義夫の教えが深く刻まれているのだと感じた。

また、山本さんは、自身のふだん



▲橋本ご夫妻

記の活動を「書いててよかった。どんなことでも題材になる。色々なことに疑問が持てる」と語った。ふだん記は山本さんの快活さの一端を担っているのだろう。

ふだん記に残る遺志

山本さんのお話を聞いてさらにふだん記に興味を持った私は、橋本義夫の息子にあたる橋本鋼二さんと、妻の橋本緑さんを訪ねることにし

た。お2人とも優しく、急なお願いだったにもかかわらず、温かく出迎えてくれた。ふだん記にはいくつかのグループがあり、その中でも橋本さんらは「雲の碑」という、橋本義夫の理念をまっすぐに受け継いだグループで活動している。緑さんは現在、その「雲の碑」の窓口の役割を担っているそう。年に2回、参加者を募ってふだん記を発行しており、受け取った原稿の誤字や事実誤認は緑さんが修正し、その後、校正をスタッフで行っているという。

「下手なころ」

ふだん記の魅力について伺った際、山本さんと橋本夫妻が一番に挙げたことがある。それは「下手でいい」ということだ。時代は戦後日本、男女格差や貧富の差など様々な問題を抱えながらも、復興と経済成長を目指し人々が躍進していた時代。新聞の投稿などは学のある人間が嗜むものであり、庶民にとって自分の書

いた文章を人に見せる行為というのは非日常的なことであった。

そんな世の中に、橋本義夫は「ふだん記」という手段をもって切り込んできた。社会格差などから生まれた文章を書くことの抵抗感を、「下手でいいから」という激励と共に払拭し、自分の言葉で自分の記録を書かせた。文章を書くことは恥ずかしいことじゃない、何を書いたっていい。それをまとめて本にして後世に



▲様々な地域に「ふだん記」のグループがある

残す。「どんなものでも、自分で思っていることを言葉で書けば本になる。残るんだよ」という橋本義夫の言葉は、当時の民衆に力を与えた。

庶民が文字を残すということ

橋本義夫は、庶民を何より大事にした。庶民が文章を書いて本にし、残すことに意味があると考えていた。

東日本大震災があった2011年と、新型コロナウイルスのパンデミックが発生した2020年に発行されたふだん記を、橋本夫妻の書庫で読ませてもらった。その土地でその時を生きていた人々のリアルな思いが、本になって残されていた。それだけじゃない。今年の冬は寒い、今年は米が豊作だ、最近はこの歌が流行っている……。北海道から九州といった広い範囲で愛されている活動故の、土地柄や時代の流れ、庶民の目が捉えた社会や生活の中の小さな幸せが、ふだん記には詰め込ま

れている。

橋本鋼二さんは「ふだん記には戦争の記録なども多く、それを残せるのは自分らが最後の世代だ」とおっしゃっていた。ふだん記のバックナンバーを見ると、確かに戦争、特に八王子空襲に言及した記録も多く残っていた。公的に残された記録ではないそれは、その痛みや悲しみを痛切に私たち読者に訴えかけてくる。美しいだけじゃない八王子の景色。しかし同じように、八王子の街で生まれた幸福の様子も沢山残されている。この町で生きた人にか書けない生きた記録だ。

私がふだん記を初めて読んだとき、エッセイでもなく日記でもない、誰かの思い出をのぞき見しているような感覚になった。独り言を書き連ねているようでいて、どこか余所行きな文章。それはまるではるか遠くの、またはずっと先の未来の人に読まれることを待っているようだ。情報としての役割だけではなく、

土地も時間も超えた先の「庶民」が、真摯に書いた一冊の文章を前に、そんなことを感じた。

八王子でふだん記を書く人々

ふだん記は年々会員が減り続けており、今では一番若い人で50代だという。広げていきたい思いはあるが、やはり難しいところがあるそうだ。この八王子で生まれ、何十年にも渡って人の思いを繋げてきたふだん記が、このまま衰退してしまうのは、非常にもったいないことだと思う。自ら筆を執って自分と向き合う時間、それらを本にして共有する空間は、せわしない社会の中で、かけがえないものになるのではないだろうか。私がミコタマの活動を続けている理由も、同じようなことなかかもしれない、とふと思った。誰かに強制されたわけじゃない、誰かに見せるための文章を真摯に描く。それは気づいていなかっただけで、私にとって物凄く大切なひとときなの

かもしれない。橋本義夫は言った。字が汚くても短くても下手でもいい。要は「書くか、書かぬかである」と。自分の書いた文章を人に見せる行為が日常的となった現在でも、そんな橋本義夫の想いは、人々に愛され、守られるふだん記の中で語り継がれている。

広野楓花（日本文化学科2年）

|| 文・デザイン

児玉悠斗（心理学科2年） || 写真

.....
ふだん記グループ「雲の碑」

〒192-0913

東京都八王子北野台2-13-6

TEL 042-636-8422

ふだん記グループ「雲の碑」窓口の電話番号、住所を記載する。気になった方はぜひ投稿してみてください。

織物をつなぐ

—その原動力とは—



▲はちやくにある高機を織る村野さん

八王子は織物の街として栄えてきた歴史を持つと聞く。そこで、今回は桑都日本遺産センター八王子博物館（以下…はちやく）で織物展示のガイドボランティアをしている村野圭市さんにお話を聞いた。

絹を活かすために

現在ガイドボランティアをされている村野さんは、東京都立八王子工業高等学校の出身だ。八王子工業高校は八王子織物染色講習所を起源（1887（明治20）年）とし、八王子の織物産業を担う人材育成の役割を果たした。村野さんはそこで主に「染め」と「織り」に関する分野を学んだ。

卒業後、八王子で生産される紋織お召（上質な織物の一種）の多摩結城工場に就職、その2年後には農林水産省の蚕糸試験場に転じた。そこで「絹織物の風合（あじ）」という感覚的な評価を客観的な数字に表す方法に取り組んだ。その後、衣服の

帯電防止法の研究を命じられた。実際にドライクリーニング現場では静電気による火事も起こっていたという。

「この問題を解決するためには、電気のことを学ぶ必要がある」そう考えた村野さんは、東京電機大学短期大学に入学した。大学で学んだ知識を生かし、静電気が起きないような糸の組み合わせを探った。研究は10年にわたる。絹は帯電しにくい上、帯電したとしてもプラスに帯電しやすい。そこで、「はげしくマイナス側に帯電する合成繊維と絹を擦り合わせれば、摩擦しても帯電障害（静電気による障害のこと。衣服が張り付く不快感など）が緩和されるか、相殺される」という仮説を研究し、絹の繊維上にて証明した。

大学で未知の分野を勉強してまで絹を活かすために努力したことは、そう簡単にできることではない。村野さんの絹に対する一貫した姿勢とその熱意は驚くべきものだ。

教えるうちに変化する手つき

はちばくでは、明治時代に実際に使われていた高機たかばたという種類の織り機で、機織りの体験ができる。高機では、腰板こしいたに腰をかけ、ペダルのような踏み木を踏むことで織りあげる。

体験には小学生が多いという。ガイドの村野さんは、展示資料を用いながら丁寧に機織りのやり方を教える。すると、最初はぎこちなかった子供たちの手つきも、教えるうちにだんだんと慣れ、余裕が生まれてくる。そうしていく内に、経糸たていとの間に緯糸よこいとを通すのに使われる、シャトルという道具を、滑らかにくぐらせることができるようになるという。村野さんは「うまく織れなくても、一生懸命になって機織り自体を楽しんでくれる姿が嬉しい」と微笑みながら話していた。

私も実際に村野さんに教えてもら

いながら、初めて機織りを体験した。確かに、慣れると速度を上げ、リズムよく織ることができて楽しい。機織りを体験しに来る小学生の気持ちがよく分かった。

織るだけじゃない

昔ながらの機織りを体験するためには、はちばくでは過去の資料を参考に展示物を作っている。そこで村野



▲左手にシャトルを握る筆者

さんは、学芸員おこなが行っている機織りの準備を手伝いながら、知識を来館者や学芸員へとつないでいる。

体験で使われる機織りは、640本以上の経糸を張る準備が必要だという。そして、それらはなんとすべて手作業でおこなわれている。村野さんや熟練した人なら、1時間程度で終わる作業だが、慣れていない人だと半日以上かかる作業である。経糸が少しでもねじれたり緩むと織れないため、やり直す時間を含めるとさらに時間がかかるそうだ。また、脇目も振らずに集中し、専念しなければならぬ作業のため、非常に時間と集中力を使うと村野さんはおっしゃった。それが完成すれば、あとは織るのみである。私たちが体験する工程に入るまでに、織物づくりの作業の8〜9割は終わっている、というのだ。機織り体験ではその仕上げにあたる部分だけだ。村野さんは、一番手間のかかるその準備こそが重要で、過程を知ってほしいと言う。



▲経糸を張る準備に使うものを見せてくれた

「私たちには知らないことが多い。かっこいいものの裏には失敗や反省、たくさんさんの試行錯誤があるはず。そこに気がつけるようになることが大切だ」と、続けた。古くは江戸時代に始まり、現在も発展を続ける伝統的な八王子の織物の歴史や製作の奥深さを知ってもらうための入り口となるのが、体験という機会だ。展示のガイドは、まさに入り口への道しるべで、体験を通して織物



▲伝統的な織物や糸の数々

の魅力や、その裏に隠された努力を伝える重要な役割を担っている。

過程の中の楽しさ

長年にわたって、機織りや絹の研究に携わってきた村野さん。いったい何が原動力となっているのか。その答えは、「出来上がりまでの過程に楽しみがある」ことだという。制作中にうまくいかない部分があったとしても、それがなぜかを考えたり、別の方法を試したりする時間は、時を忘れさせるほど夢中になれるものだそうだ。

「ボランティアだから本当はむきになって来なくていいんだよ。でも来るよね。楽しみだから。辛いとか嫌だとか思ったことはない。何かの役に立ってくれるだろうと思っているから」。

「ものづくりってそういうことなんじゃないかな」そう語る村野さんの真剣な眼差しには、長年の経験と絹に対する情熱が凝縮されているよ

うだった。

* * *

村野さんが人生で長く続けてきた機織り。今はガイドボランティアという形で続けているが、その原動力が「楽しさ」であることに驚いた。というのも、ボランティアは奉仕のイメージが強く、楽しさを原動力とする村野さんの考えが新鮮に感じた



▲ものづくりに対する思いを語る様子

からである。村野さんにとってものづくりとは、単なる作業ではなく、うよまきくせつ 紆余曲折を楽しみながら取り組むものなのだ。完成への道のりの中でどんな困難にぶつかっても、その壁さえも楽しもうとする姿勢はととても眩しい。

取材を通じて、自分の専門分野を長く続けていくことの素晴らしさだけでなく、一貫した信念の粘り強さに刺激を受けた。

私も村野さんのように、自信をもって楽しいと言えるようなことを見つけ、人生をかけてそれを続けてみたいと思った。

彦坂菜々子 (史学科2年)

|| 文・デザイン

難波咲帆 (史学科2年) || 写真

児玉悠斗 (心理学科2年) || 写真

〈参考文献〉

田中優子編『手仕事の現在 多摩の織物をめぐって』法政大学出版社 (2007)

南多摩の

メカイ製作技術



後編

▲ヘネに加工する様子

京王相模原線京王堀之内駅から徒歩20分、「たんぼの学校」と名付けられた場所がある。そこでは、失われたつつある里山を拠点として、メカイ製作技術の継承に取り組む団体が活動している。『ミコタマ』第6号でインタビューさせていただいた「八王子由木メカイの会」だ。代表の塩谷暢生しおやのぶおさんを中心とし、材料の10月から4月までの毎週木曜日にメカイの製作技術を磨いている。

今回は、前編の取材でメカイの作り方に興味を持った私が、材料の収穫から完成までの工程を見せていただいた。

収穫と加工

メカイ製作は材料を用意するところから始まる。たんぼの学校にはメカイの材料となる篠竹が生えている。材料として最適なのは、適度に西日が当たる日陰に、まっすぐ生えている篠竹だ。篠竹とは所謂「竹」ではなく、アズマネザサという「笹」



▲作業の様子



▲里山に生えている篠竹

の一種だ。放っておくと、地面を覆いつくしてしまう厄介者でもある。実際に篠竹を伐採し、運んでみるとその自生地は、急斜面で足元が悪く運び出すのに苦労した。

伐採してきた篠竹は、メカイ包丁で縦に四等分する。まず、利き手にメカイ包丁を縦に持ち、固定する。次に、反対の手に篠竹を持ち、断面に刃を入れ、繊維にそって割く。途中の硬い節を割りながら、徐々に篠竹を押し出していく。これをもう一度繰り返して、篠竹を四つ割りにする。「硬い節の部分を割る際の力加減にはコツが要るが、慣れば簡単になる」と話す同会員の手もとは素早く動く。



▲篠竹をへぐ様子

篠竹を剥ぐ

篠竹を加工し、籠を編むひも状のヘネという素材を作る。

篠竹の先端を削ぐことで、篠竹の表皮を剥離させる。左上の写真のように左手に篠竹を持ち、先端を口に咥えて固定し、右手で表皮を引っ張りながら、ヘネを剥ぎ取る。この作業を「ヘネヘギ」といい、剥ぎとられた篠竹をヘネガラという。ヘネガラは、後の工程で補強材として利用する。

篠竹を咥えることを気にする方もいるかもしれない。私も最初は驚いたが、ふと小学生のときの記憶が甦った。友人たちと下校の最中、植え込みに咲いていたツツジの蜜を吸っていたものだ。そう思うと、気にならなくなっていた。私が苦戦しているときの方も「この作業は大変かもしれないけど、綺麗に剥がせば、ストレス発散になるし、結構楽しいのよ」と語ってくれた。

メカイの編み方

メカイを編む工程は大まかに五段階に分けられる。

- ① ヘネを六角形に編み、籠の底を形作る。
- ② 余ったヘネを上方へ折り曲げ、胴を作る。
- ③ ヘネを内側に巻きこんで籠の縁を作り、補強を施す。
- ④ 薄い竹を用いて、力骨（芯の役割を持つ）を組み込む。
- ⑤ 籠の底の角を補強する。

この作業をこなして編み上げることにより、メカイは完成する。どこか一つでも編みが甘く、ヘネが緩んでいると籠としての強度が保てなくなり、機能を果たさなくなってしまう。

籠に力骨を組み込む際、疑問に思っていたメカイ包丁の特徴的な用途が分かった。籠の縁にメカイ包丁のつを差し込み、少しの隙



▲①底を作っていく



▲④胴を作っていく



▲(上)③縁を作る (下)④力骨を組む



▲取材の様子

朝の9時から始めた作業も気づけば3時間経ち、お昼時になっていた。

可能であると感じる。

朝の9時から始めた作業も気づけば3時間経ち、お昼時になっていた。可能であると感じる。朝の9時から始めた作業も気づけば3時間経ち、お昼時になっていた。

間を開け、力骨を組み込む際に使用する。一カ所だけこの工程を体験させてもらったが、竹が折れないか心配するほどに力がある作業だった。ハラハラしながら作業をしていると「竹は丈夫だからそこまで心配する必要はない」と声を掛けられた。

メカイの繋がり

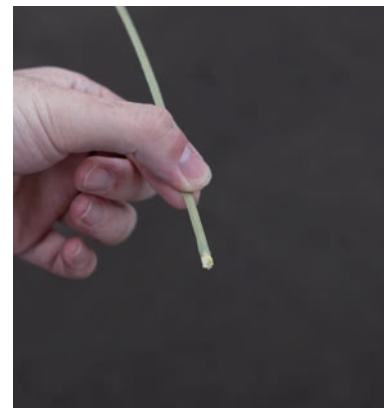
会員のほとんどはこの活動で初めてメカイを作り始めたという。そのため、作り始めて日の浅い人から、経験が豊富な人まで幅広く参加している。誰かが分からない工程があると、手順の分かる方が一緒に同じ工程を行い、説明しながら進める。私も実際に手を動かしながら作業することで自然と同会の輪の中に入ることができた。現在、大学生の参加者はいないが、私たちの世代も技術を学び、次の世代に繋げていくことは



▲つのが特徴的なメカイ包丁



▲ヘネガラ。縁の芯として使う



▲籠を編むヘネ。細く薄い

食べ盛りな大学生が取材に来るとい
うことで、会の方が作ってくれたお
弁当とコーヒーゼリーを、野球の
ワールドシリーズ中継を囲むように
広げた。集団でお弁当を食べるなん
て、小中学生のころを思いだし、少
し懐かしく感じる。休憩時間からも、
会員同士の和やかであるが強いつ
ながりが垣間見え、そうした関係が
あってこそ、地域に根ざした技術の
継承がされていくのだと実感した。

同会は、メカイをより多くの人に
知ってもらおうと、講習会を始めと
したいろいろな活動をおこなってい
る。「多くの人たちにメカイについ
て知ってもらい、少しでもメカイを
製作できる人が増えてほしい」とい
うのが会の願いだ。

かつて南多摩地域を中心として多
くの農家が製作していたメカイは、
発祥した村から人から人へ広まって
いったものだった。この人から人へ

の結果として、現在までメカイが引
き継がれてきた。

現在は限られた人しか製作するこ
とができなくなったメカイは、人の
つながりを象徴するとともに、日常
生活の知恵である。また、公園や空
地が増え続ける篠竹を、定期的に収
穫し活用していくことは、持続可能
な社会を実現するものであるだろ
う。そのため、便利な製品が溢れる
現代でも、多摩地域の農家を支えた
メカイは次の世代に残していくべき
ものだとはっきりと思った。

北澤那由太（心理学科2年）

|| 文・写真・デザイン

堀越峰之（帝京大学総合博物館学芸員）

|| 取材協力

〈参考文献〉

多摩市史編集委員会『多摩市史 民俗
編』多摩市（1997）
（財）たましん地域文化財団『多摩民
具辞典』けやき出版（1997）

八王子市市史編集専門部会民俗部会
『新八王子市史民俗調査報告書 第
2集 八王子市東部地域 由木の民
俗』八王子市総合政策部市史編さん室
（2013）
『八王子市文化財保存活用地域計画
第3章八王子の歴史文化の特徴』
八王子市教育委員会（2022）



▲取材の様子



▲メカイの完成形

狭間地域巡検記

▲迫力のある獅子舞。獅子は二体おり、雄二体が雌一体を奪い合い、最後に三体とも仲直りするというシナリオ

近世の挟間

八王子市狭間は市の西南部にあたり、近世は下柵田村しもくまだむら・小字狭間といわれた。下柵田村は山田村、小比企村、館村、寺田村、三田村、上柵田村に囲まれた地域で、南境には湯殿川が流れている。『新編武蔵野国風土記稿』の「下柵田村」には、「平カニシテ少シク高低アリ西ノ方ヘヨリテハ山アリ」と当時の地形が記されている。また、水田もあったようだが、主として陸田おかだが主だった。陸田とは畑に米の水稲を植えて育てることで、地表をきれいにならしてから水を引き入れる。湯殿川があるからこそできた方法だ。さらに「村民暇アレバ蚕桑ヲ事トス」とあることから、養蚕も行われていたことがわかる。

近世以降の挟間

1889（明治22）年に市町村制が施行されると、現在の八王子市域

は八王子町、小宮村、横山村、元八王子村、恩方村、川口村、加住村、由井村、浅川村、由木村の一町九村となった。下柵田村はこの内の横山村に属し、神奈川県南多摩郡横山村となった。1893（明治26）年には東京府に移管され、1943（昭和18）年の都制施行により東京都南多摩郡横山村になった。さらに1955（昭和30）年に横山村は八王子市と合併して八王子市となり、



現在の町区分を旧市町村界にあてはめ、10地区に割り当てて地区界としたため、現在の町会区分や旧町村界とは必ずしも一致しない。なお、町名の記載に際して丁目の表記は省略した。

10地区の位置と町名

現在の八王子市狭間町が誕生した。

狭間町の社会生活

現在の狭間町の人口は5981名、世帯数は2882世帯だ。

町会組織は15の「区」で括られており、「区」の中には30の「組」がある。「組」は近隣で10〜15軒をひとくくりとしている。このような最小単位のコミュニティを「組」とか「クミアイ(組合)」と呼んでいる。例えば子ども同士が活動する「子ども組」や一定年齢層の若者が活動する「若者組」などがある。狭間という「組」は、居住の近接性によって結びつく組織で、かつて冠婚葬祭や田植えなどの労働の際には「組」内で助け合っていた。

狭間町の人生儀礼

冠婚葬祭を「組」内で助け合っていたのは、いずれの行事も自宅で行っていったからだ。現在のように葬儀会社や結婚式場があったわけでは

ない。そのため、近隣同士が互いに助け合いながら行っていた。

たとえば結婚式。狭間町でも昭和20年代半ばころまでは自宅で執り行っていたようだ。祝儀をあげたあとの宴席では近隣の女性たちが手伝いをして食事を用意していた。葬式も同様だ。亡くなったことを近隣に知らせたり、葬具などの準備をしたり、これらの作業は組の人たちが助けていた。最も大変だったのが、棺を埋める穴を掘ることだった。横山村では1921(大正10)年に市営火葬場が開設されたため、他地域よりも土葬から火葬になる時期は早かったのだが、1955(昭和30)年頃までは狭間でも土葬を続けていたという。「メドバン」と呼ばれる穴掘り役は一年交代制だった。結婚式、葬式以外に、現在と異なり自宅で行っていたのが出産だ。全国的にみると、1955(昭和30)年は病院、診療所、助産院などの施設内での出産は45%だったが、それ

から20年後の1975(昭和50年)年には99%以上が施設内で出産している(人口動態統計 平成29年より)。高度経済成長期に大きく変わったことがわかる。狭間では1935(昭和10)年代までは自宅出産だったが、1945(昭和20)年代には病院出産をする人が増えていった。

狭間町の年中行事

このように、人生儀礼は社会の変化とともに大きく変わっていくが、お盆や正月は今も大切な年中行事として行われている。

狭間町では正月準備として12月28日前後に輪飾り、丸餅、清酒などの正月の飾りつけをする。正月の三日はおせち料理を食べる。正月の準備で忙しかった女性にかわり、三日は特に男性が準備をするそうだ。小正月には木の枝の先に餅を丸めてつける「繭玉」を作る。翌朝にはどんど焼きを河原で行い、達磨がついた竹を立て、その周りに正月飾りを

つけて点火する。その際に餅を焼くが、この餅を食べると無病息災になるといわれている。

お盆は7月13日から始まる。13日を「盆の入り」と呼び、午前中は墓参りをしてナスの牛ときゅうりの馬を置く盆棚を設ける。そして夕方になると屋敷の入り口で火を焚き、門前の両端にオガラを置いて燃やし、線香を近づけ、火をつけてその脇に立てる。これはあちらの世界から迎えるご先祖様が自分の家を迷わないようにするための目印となる。7月16日は「盆の送り」だ。ご先祖様があの世に帰るため、迎え火と同様に屋敷の入り口前で火を焚く。また、「先祖が乗って帰る」といい、盆棚にあるナスの牛とキュウリの馬の頭を家の外に向けて並び替える。かつてはこれらの盆の飾りは川に流していたという。

狭間町の生産・生業

正月13日の繭玉作りは、かつては、



▲鈴木日記



▲獅子の頭。今使われている頭は二代目



▲高楽寺裏の横穴石仏群

繭の豊産を願って作られたものだった。『鈴木日記』にも養蚕について多くの記述がある。『鈴木日記』から狭間では、5月から6月が桑の収穫時期で、春に蚕を育てていたことがわかる。養蚕は年に数回行っていた場合もあり、季節によって呼び方が異なる。狭間のように春に養蚕を行う場合は「春蚕」と呼んでいた。『鈴木日記』にも、小正月に餅つきをして繭玉を飾っていた記述がある。『鈴木日記』は1887（明治20）年ま

での日記しかないが、その後も養蚕は続けられていた。狭間のあるお宅では、1887（昭和20）年頃から7、8年ほど養蚕を行っていたそうだ。蚕の餌となる桑の葉は濡れていると蚕がお腹を壊すため、雨が降る前に桑を取り乾かしていた。乾燥させるにも焚き火は使えない。なぜなら焚き火の暑さで蚕が死んでしまふからだ。このように蚕を育てるのは大変な手間と労力がかかる。男性は桑を、女性は蚕の面倒をみていたといい、子どもと同じように蚕を育てていた。

養蚕の他に、稲、麦、里芋、さつまいも、とうもろこし、ごぼう、豆などを作っていた。また、牛、豚、鶏、馬を飼っていた家もあるようだ。馬は輸送用に育てていた。

狭間の信仰と獅子舞

狭間には高楽寺と御嶽社がある。高楽寺の横穴石仏群は1977（昭和52）年に八王子市の史跡として指

定された。横穴石仏群に関しては、狭間の昔話として以下のように伝えられている。

「観音岩窟」

狭間の高楽寺の近郷でもめずらしい観音岩窟という霊場は、天明の大飢饉の際に了弁というお坊さんが、無事平穏・五穀豊穰・悪病退散などを命がけで祈念しながらたった一人でこつこつと掘ったものだと言えられ、多くの仏さまが安置されている。そのため、狭間のあたりはありがたい加護がいただけ安寧平穏であった。秩父めぐりを諦め観音岩窟にお参りした老は、八十八の米寿をすぎて「観音さまが迎えにきた」と告げ亡くなったそうだ。

現在は一般公開されていないが、史跡指定前までは自由に出入りできる場所であり、子どもの遊び場、度

胸試しの場として親しまれていた。狭間の信仰を考えるうえで欠かせないのが獅子舞の存在だ。

狭間に伝えられる獅子舞は「一人立ち三頭獅子舞」、「三匹獅子舞」などと呼ばれる芸能だ。現在、八王子市内では同様の三匹獅子舞が八か所で伝えられており、いずれも八王子市無形民俗文化財として指定されている。狭間の獅子舞は地域の青年たちを担い手として伝えられてきたが、1960（昭和35）年に狭間獅子舞保存会が発足し、現在では保存会が中心となり伝承されている。

近世は八朔（8月1日）に奉納されていたが、1873（明治5）年の暦の改正により9月1日に変更された。その後、1881（明治14）年以降は8月16日に祭礼日に変更され、現在はこの日に近い土日に実施されている。

近代に入り変化があったのは日程だけではない。明治以前は神棚田村、現在の高尾町の氷川神社で奉納され

ていた。高薬寺から甲州街道を通過して巡行し、氷川神社へ向かう。明治年の区番組制の施行により、一村一社となったことから、狭間の獅子舞は狭間の神社である御嶽社で奉納することになった。

狭間の獅子舞は五穀豊穡、無病息災を願って演じられている。この地で生活をする人々にとって獅子舞は豊かな暮らしをもたらしてくれる存在として考えられていた。演じ手や日程、奉納場所に変化があっても、獅子舞を大切に思う気持ちは変わらず持ち続けている。

＊ ＊ ＊

2024年度前期「伝統文化演習Ⅰ」にて、受講生たちが狭間町の民俗調査を実施した。本文は学生たちの調査記録も含めて記している。

末筆となるが、巡検、獅子舞に関するレクチャー、その後の聞き取り調査にも快くご協力くださった狭間獅子舞保存会の皆様に感謝申し上げます

る。また、現地との調整を行ってくださった八王子市郷土資料館の皆様、ガイドボランティアの皆様にも重ねて感謝申し上げます。

高久舞（日本文学化学科講師）

|| 文・写真

児玉悠斗（心理学科2年）

|| デザイン・写真

彦坂菜々子（史学科2年） || 写真



▲舞が行われる前に棒術が披露される

〈参考文献〉

蘆田伊人編『大日本地誌体系 第9巻 風土記稿5』（『新編武蔵野国風土記稿』巻之百二下 多摩郡之十四下）雄山閣（1934）

八王子市市史編集専門部会民俗部会

『新八王子市史民俗調査報告書 第3

集 八王子市西南部地域 浅川の民俗』八王子市市史編さん室（2015）

八王子市郷土資料館編『鈴木日記 一

〆六』八王子市教育委員会（2017

〆22）

高久舞「八王子市の三匹獅子舞概況」

『帝京大学文学部紀要 日本文学』

五四号（2023）

佐藤広『続 八王子の民俗―地誌

と伝承から見た八王子―』揺籃社

（2024）



▲獅子と一緒に舞う軍配

「当たり前前」のありがたさを

後世に繋ぐ

「養蚕がもたらすもの」



▲いろいろなハプニングも笑顔で話してくださった、都内唯一の養蚕農家を営む長田誠一さん

養蚕ようさんや織物製作が盛んに行われて

いた歴史を持つ八王子は「桑都そうと」と呼ばれ親しまれている。八王子は農耕に適さない土地が多いため、生育環境を選ばない桑を餌とする養蚕が副業として発展したのだ。

最盛期には一般の農家でも一家総出で養蚕に取り組んだ様子が記録に残っているほど、広く養蚕が行われていた。しかし、時代の移り変わりと共に養蚕は衰退し、今回取材させていただいた八王子長田養蚕が都内唯一の養蚕農家となった。

養蚕ってなに？

そもそも養蚕とは、蚕を飼育し、生糸の原料である繭まゆを生産することを指す。字面だけだと一見単純そうだが、全くそんなことはない。栽培した桑を自ら採集する重労働は勿論、蚕の飼育は温度管理や給餌きゅうじに細心の注意を払わなければいけないからだ。

蚕はオキコサマ、オコサマと呼ば

れて大事に育てられる。蚕が繭を作る形態になるまでには、いくつもの段階があり、卵から孵化し脱皮の準備をする状態になるまでが1齢、その後4回（5齢まで）このサイクルを繰り返す。5齢の後、蚕を格子状の枠に入れると、糸を吐いて繭を作り始める。8〜10日程置き、繭を収穫する。その後、繭を作る足場として吐いた糸（毛羽けぼ）を取り除き、繭を仕上げる。蚕は夕方には朝の倍の大きさになるほど成長スピードがとても速い。飼育は温度管理が徹底され、次の複数の段階を経る。

① 稚蚕ちさん

赤ちゃん期。細かく刻んだ桑の葉を与える。

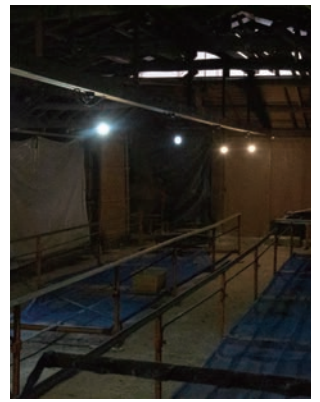
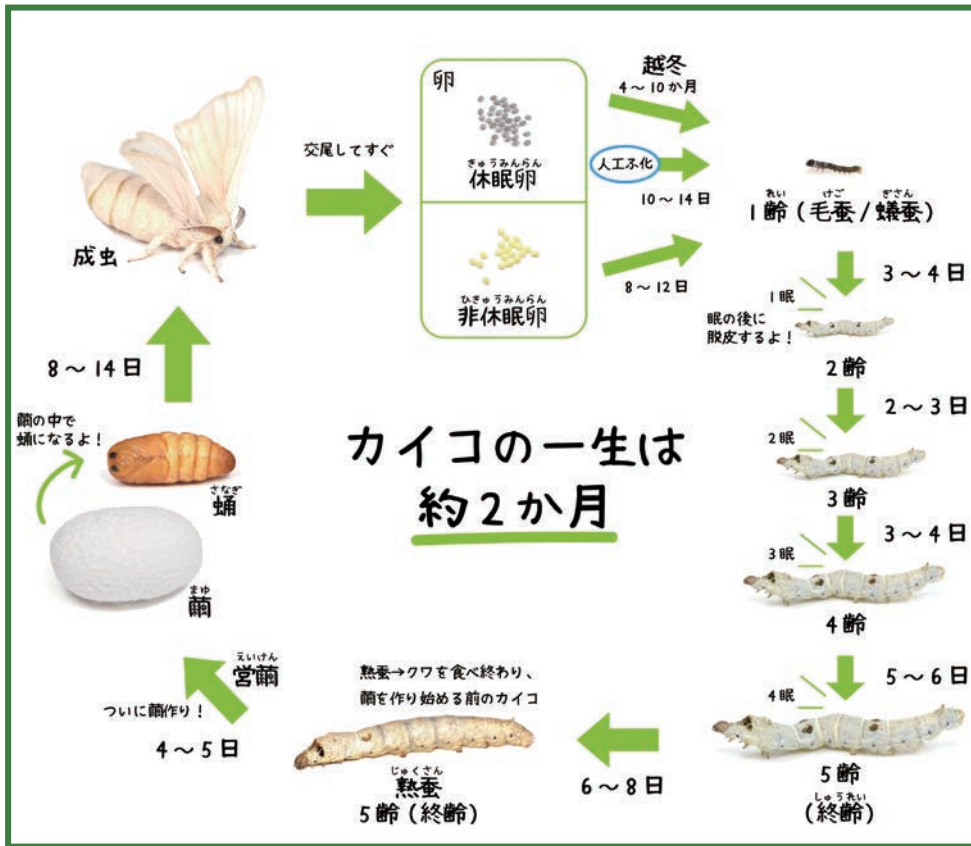
② 壮蚕そうさん

成長期。生涯のうちの9割の桑の葉を食べる。

③ 熟蚕じゅくさん

桑の葉を食べなくなり、繭を作り始める状態となる。

蚕の飼育は多くても年に4回行う



▲稚蚕室から移した後の飼育小屋



▲毛羽とりを行う前の繭

▲カイコの一生 (柳澤 2024 “伴野・塩見 2019 を参考に作成”)

大学生である私たちとあまり変わらない若さから今日まで長田養蚕を守ってきた誠一さんだが、これまでの軌跡の中で最も大変だったことは、祖父・喜兵衛さんが亡くなった際の相続問題だったという。喜兵衛さんと母・百々代さんに養蚕のいろはを教えてもらっていたというなか、「自転車で畑に行っていたような丈夫な人だった」という喜兵衛さん

「誠一さんは、春秋には養蚕を行っていた。祖父・喜兵衛さんが残した家にしか養蚕場がなく、別の場所では生活していたその時期は、叔父や叔母に電話をして、

「いついつ暇でしょうか」

「その日はだめだ」

「じゃあいついつは可能ですか」というように日程を調整しては養蚕場に通っていたという。相続で大変ななか、養蚕も行っていったというの

機会があり、春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕などと呼ばれる。

都内唯一の存在

今回、今では都内唯一となった養蚕農家である八王子長田養蚕の代表、長田誠一さんにお話をうかがった。

誠一さんは、19歳という若さで先代である亡き父・長田泰一さんの後を継いで12代目として養蚕業を始めた。現在は、奥様の晶さんと一緒に春蚕、晩秋蚕の年2回の飼育を行っている。

「叔父や叔母たちには、『私たちにもここに住む権利があるから、明日から荷物をまとめて出ていけ』って。(私は)結婚したばかりで0歳児もいたのにな」と話してくれた。

誠一さんは、春秋には養蚕を行っていた。祖父・喜兵衛さんが残した家にしか養蚕場がなく、別の場所では生活していたその時期は、叔父や叔母に電話をして、

「いついつ暇でしょうか」

「その日はだめだ」

「じゃあいついつは可能ですか」というように日程を調整しては養蚕場に通っていたという。相続で大変ななか、養蚕も行っていったというの

だから、並大抵のことではない。

「やっぱりこの長田家を繋ぐ人がいなきゃだめだ」と、最初は軽い気持ちでスタートした養蚕業も、徐々に責任感の重いものになり、現在に至るそうだ。

作業の裏側

蚕の飼育は大変な作業ばかりだが、一番の苦労は最後に残った飼育台の片付けだという。稚蚕室から移された蚕を育てる飼育台は、大人の太もも辺りの高さしかなく、柵に囲まれたその飼育台に残った桑の枝や蚕の糞を片付けるのは、腰を曲げての作業になるためかなりの重労働だ。それに加えて、繭を作る工程を行うために蚕を別の場所に移した途端、においが一気に出て、コバエもわくののだという。この大変な作業をしっかりとこなすことで次の養蚕期に備えることが出来る。

また、蚕は温度に繊細なために近年の異常な暑さに耐えられず、昨年

と一昨年は病気で全滅してしまったそうだ。「今年は、孵化を10日遅らせて、稚蚕室には人間よりも早くエアコンを導入して、なんとかカストレスを軽減して育てることが出来た」と飼育の苦悩も語ってくれた。

蚕は無駄がない

そうして大事に育てた蚕は、糸が取れば用済みというわけではない。中の蛹は、粉碎して鯉の養殖や釣り餌にも活用されている。蛾が孵化してしまったものや2匹でひとつを作ってしまった繭は、糸にはできないが煮詰めて真綿まわたというものにして利用できる。蚕の糞も、桑畑に撒いて再利用する。こうした一つの無駄もないところも、蚕の魅力である。

命をいただくありがたさ

誠一さんは養蚕業の傍ら、小学校の学習支援にも尽力している。主に小学3年生を対象に養蚕のことや蚕を通して学べる多くのことを教え

ている。「学校の授業でも、『繭の中に蛾いないよね!』って言って勘違いしている先生もいるけど、『いなきゃしょうがないでしょ!』って。蛾が出てきてしまったら、繭に穴があいて糸が切れてしまっただけのものにならないでしょう。こういうところから、お蚕は命をいただく家畜なんだということを伝えていきます」。

また、小学生に「お蚕は人間が作った自然界には存在しない動物だよ」というと「えっ」と驚かれることも多いそう。自然にいる昆虫を捕まえて、白いもの(繭)を作っていると思っっている子どもたちもいるが、そうであれば養蚕農家は必要ない。「みんなが捕まえてきたような昆虫とは違い、蚕は自然に放しては生きていけない、人間が飼育しやすいように作った動物なんだ」ということを教えているという。

最近では、養蚕の話以外の「当たり前ではない有難さ」を教えることの方が多くなっているという。誠一さ



▲学習支援の相棒



▲学習支援で作るランタン

んは、子どもの頃に親がニワトリを血抜きして捌いて食べたことなどの命に触れる経験をしたのだそう。そのことを踏まえて「今は刺身が泳いでいると思ってる子もいる時代で、肉は肉という物体であり、牛や豚から切り刻んだものだということが知らないことが多い。そういう経験がない、ものが当たり前にあると思ってる世代に、私みたいな経験のある人間が物事のありがたみを教えていけないと思つています」と話してくれた。

誠一さんは今後も学習支援活動を続けていく上で、ご自身の経験や養蚕の仕事を、本や映像に残したいという望みがあるという。誠一さん自身が現場に赴かなくても、いろんな人が見てわかるもの、ずっと残していける何かがあるといいと語ってくれた。

* * *

私は母校である小学校にて、地元

神奈川を学ぶため、シルク博物館へ校外学習へ行ったり、実際に蚕を飼育するなどの経験を持っていた。

今回、長田養蚕を取材するにつれ、当時なんとなくぼやけていた「養蚕」の輪郭がはっきりとしてきた。私の地元と八王子は当時、生糸で繋がっていたと考えると、歴史の積み重ねを感じた。

そんな私の地元と少なからず縁のある八王子だが、昔から栄えていたわけではない。田畑に適する土地がなく、養蚕、織物という生業を始め、「多摩結城」というブランドにまで発展してきた。ここから織物や養蚕の八王子、桑都ができあがった。これは先人たちの努力の結晶であるように思う。今の豊かさがあるのは、どこかで支えている人、もの、家畜がいるからなのである。長田さんはこのことをこのことを忘れずに生活を送ることで、豊かな生活が成り立つのではないだろうか。

難波咲帆（史学科2年）

|| 文・デザイン

児玉悠斗（心理学科2年） || 写真

〈参考文献〉

八王子市市史編集専門部会民俗部会

『新八王子市史民俗調査報告書 第4集 八王子市北部地域 加住の民俗』

八王子市市史編さん室（2015）

柳澤静磨「カイコの飼育方法」磐田市竜洋昆虫自然観察公園（2024）

<https://ryukon-museum.note.jp/n/h0905b9d624b>

伴野豊・塩見邦博「実験1カイコの生

活環と飼育」『カイコの実験単…カイコで生命科学をまるごと理解！…生物の授業やクラブ活動で使える実験集』（2019）P.20-37

▲様々な道具達



▲高尾山薬王院の養蚕守護の護符。現在はもう発行していないそうだが、かつて養蚕農家が大切な蚕をネズミから守る為に薬王院に求めていたもの



狭間の獅子舞 (2025年8月18日撮影)

ミコタマ部員が切り取った八王子の記録は、いかがでしたでしょうか。

現在まで大事にされている伝統芸能、狭間の獅子舞。

南多摩の伝統を今に伝える工芸品であるメカイ。

その時代その街の暮らしを市民の目線で書き残されたふだん記。

街を形作るそのひとつひとつに、人々の生きてきた軌跡や生活、

それらを後世に残そうという思いが込められていることを知りました。

私たちが生きるこの世界はひよっとすると、

そういうものの積み重ねで成り立っているのかもしれない。

歴史と共に伝わった思いを抱えて、私たちは生きているのではないのでしょうか。

文化の繋ぎ手としての博物館 ～八王子市郷土資料館の役割～

八王子市郷土資料館とは

中央高速道路建設に伴う宇津木向原遺跡の発掘と井上郷太郎氏の考古資料の寄贈を契機に、市民の博物館建設の機運が高まり、文化財保存と研究等のため1909（昭和42）年に東京オリンピック開催の記念事業の一つとして開館。現在は展示場を移転し、桑都日本遺産センター八王子博物館（愛称「はちはく」）として、日本遺産「霊気満山 高尾山～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」の情報発信を行っている。



「キラリと輝くもの」とは？

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信する「ミコタマ」。多摩の博物館の中に名を連ねる八王子市郷土資料館としても、興味深く拝読しておりました。大学生の柔軟でフレッシュな視点と文章に、読むたびに今まで気づかなかつた「多摩のヨコガオ」を見つけるようです。

今号では編集部の皆様が、八王子の各所に足しげく通い、熱心に取材して八王子の「キラリと輝くもの」を見つけてくれました。時代と共になくなりつつある技術や伝統は、それを受け継ぎ守る人達の姿とあわせて読者の皆様にも魅力的に映ったかと思えます。

我々には魅力的に映るこれらの技術や伝統は、本来その土地の人々が生きていくために編み出し、培ってきたものです。当人達にとっては「キラリと輝くもの」というよりは、

身近で当たり前なものと考えているかもしれません。そうした身近で当たり前なもの、日々の生活との関連が強いため、時代の変化と共に忘れていってしまうものも多くあります。

それらがミコタマの活動のように、外部からの取材や研究等で取り上げられることで「キラリと輝くもの」として認知されるようになります。

そして、文化が廃れないよう保存し、今に生きる人達へ繋げていくことが博物館の役割です。今回は当館がミコタマと八王子の文化の担い手を繋ぐことで、読者の皆様へ魅力の一端をお伝えすることが出来、大変嬉しく思います。

郷土資料館の新たな取り組み

「はちはく」での活動

さて、そんな当館は、令和3年3月に上野町の施設を閉館し、同6月に名称を「桑都日本遺産センター

八王子博物館」（愛称：はちはく）としてサザンスカイタワー八王子3階へ移転し、活動を続けています。はちはくは日本遺産ストーリー「霊気満山 高尾山～人々の祈りが紡ぐ桑都物語」の紹介と、新たな博物館施設の開設に向け機運を醸成するとともに、文化を繋ぐ役割も担っています。

はちはくでは年間を通して歴史講座やワークショップ等を実施し、時には今号で特集された方にも御協力



▲はちはく入口



▲公園と文化施設が一体となった集いの拠点（イメージ図）

を頂き様々な企画を実施してま
す。
さらに、はちはくでは、観光、産
業、福祉等の多分野横断的な新たな
連携を模索しています。今号の特集
も実はその一環で、はちはくと帝京
大学総合博物館との連携事業として
行ったものです。



▲吹き抜けで2階の図書館と繋がる博物館の入口（イメージ図）

八王子駅南口 集いの拠点整備事業

八王子の新たな文化拠点

はちはくで地域連携を推進しつ
つ、並行して進んでいるのが、新博
物館の整備計画です。現在、八王子
駅南口の医療刑務所跡地に、公園、
ライブラリ、交流スペース、そして

博物館が一体となった八王子駅南口
集いの拠点（仮）が建設中です。

この施設のコンセプトは「人や情
報を紡ぎ、未来を織りなすサードプ
レイス」。複合施設の強みを活かし、
訪れる人達がお気に入りの場所を見
付け、自分らしい時間を過ごせるよ
う計画しています。

新博物館は体験展示を充実すると
ともに、国宝や重要文化財も含んだ
特別展の開催を企画しています。ま
た気軽に訪れ、来館者が相互に交流
でき、新たな八王子の文化が生まれ
る仕組み作りも検討しています。も
ちろん、はちはくで行ってきた地域
連携やワークショップもパワーアッ
プしていきます。

博物館で知的好奇心を満たしたい
方や自分らしい時間を過ごしたい方
は、はちはくへ、そして令和8年10
月からは新しい博物館へおこしくだ
さい。文化の繋ぎ手として、博物館
は皆様の「知りたい」、「やりたい」
をこれからお手伝いしていきます

す。

時友彰吾（八王子市郷土資料館）

|| 文・写真

桑都日本遺産センター八王子博物館

（愛称：はちはく）

開館時間：午前10時～午後7時

休館日：年末年始、館内整理日（詳

しくは八王子市ホームページをご確

認ください）

アクセス：JR八王子駅から徒歩3分

（南口直結）

☎：042-622-8939

公式HP：

[https://www.city.hachioji.tokyo.](https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisetsu/003/hachihaku.html)

[jip/shisetsu/003/hachihaku.html](http://shisetsu/003/hachihaku.html)

八王子南口集いの拠点（仮）

開館時期：令和8年10月予定

アクセス：JR八王子駅徒歩10分

京王片倉駅徒歩8分

インスタグラム：最新情報を発信し

ていきますので、ぜひフォローくだ

さい。アカウントID「sojipark」

公式HP：

<https://soji-centralpark.jp/>

SNS を開設しました



X(旧 Twitter)
@Teikyo_Micotama



instagram
teikyo_micotama

X(旧 Twitter) と Instagram を開設しました。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNSを通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を広げていきたいと思ひます。ぜひフォローよろしくお願ひいたします！

アンケートへのご回答をお願いします！



アンケートの URL ↓
<https://forms.gle/WkNMTNBQKY8jCMJP6>

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりを持ちたいと思ひからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で1分程度です。上記の QR コードまたは URL をご利用の上、ぜひご回答よろしくお願ひいたします！

帝京大生編集部員募集中！

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信する

フリーマガジン『ミコタマ』 編集部員募集中

ご応募は
QRコードより
お願ひいたします。

帝京大学総合博物館 Teikyo University Museum
〒192-0395 東京都八王子市大塚 359 番地

TUM

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

現在、共にミコタマを作るメンバーを本学の学生から募集しています。「本を作った経験はないけど気になる」「書き物が好き」「何かを作り上げてみたい」そんな方は是非一緒にミコタマを作りませんか。

ミコタマ配送について

配送を承ります。

ご希望の方がいらっしゃいましたら、
帝京大学総合博物館までご連絡下さい。

※送料のご負担をお願いいたします
在庫の無い号もございます

帝京大学総合博物館

多摩のヨコガオ発見プロジェクトフリーマガジン

『ミコタマ』編集部

〒192-0395

東京都八王子市大塚 359 番地

HP <https://teikyo.jp/museum/>

TEL 042-678-3675

E-mail tamanoyokogaomicotama2020@gmail.com



帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2025 第9号

発行
帝京大学総合博物館

編集長
児玉悠斗
広野楓花
甲田篤郎

編集・デザイン
小島七菜 [4-5,32]
北澤那由太 [14-17]
児玉悠斗 [18-21,28-31]
広野楓花 [2-9,26-27]
彦坂菜々子 [11-13,31]
難波咲帆 [1,22-25]

特別寄稿
高久舞 [18-21]
時友彰吾 [28-29]

※ [] は担当ページ

ロゴデザイン
寺澤頼来
難波咲帆
彦坂菜々子

特別協力
都留文科大学 地域交流センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート編集部』

校閲・管理
川北友美
甲田篤郎

印刷・製本
株式会社高尾印刷

発行日：2025年3月1日
発行部数：1500部

発行 / 編集

〒192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン『ミコタマ』編集部

E-mail
tamanoyokogaomicotama2020@gmail.com

Web サイト
https://teikyo.jp/museum/

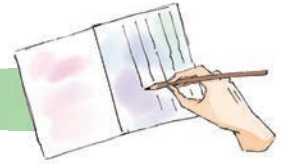
X(旧Twitter) (@Teikyo_Museum)
https://twitter.com/Teikyo_Museum

© 2025 『ミコタマ』編集部
乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。
編集部までお知らせください。



編集後記

「桑都」



そう

朝、吐く息も白く見える時期となりました。北海道から来た私からすれば関東、特に東京、八王子の冬は未知でした。実際、地元には比べ暖かく、雪も積もらず、快適な冬を過ごしています。そんな過ごしやすい八王子ではありますが、進学に伴い、上京するまで馴染みがありませんでした。『ミコタマ』の活動を続けていくにつれて、様々な人と文化に出会い、関わりが増えていきました。今回、八王子に特化した取材を行い、これまでこの土地に住み、生活した人々の生き様の片鱗が見えたような気がします。（児玉悠斗）

と

にかく寒い八王子の冬。雪の降らない地域に住んできた私にとって、八王子の冬の寒さは想像もつかないほどでした。去年は上京してから初めて見る雪に大興奮。今年も雪が降るのが楽しみです。

さて、今回は「八王子に生きる」というテーマで魅力をお届けしてきましたが、いかがだったでしょうか。

このテーマを通して、私の視点は大きく変わりました。新たな知識を得る機会になったことはもちろんですが、特に村野さんへの取材を通して、織物への熱い思いとともに、ものづくりに対する確固たる姿勢を教えてくださいました。その姿勢は、簡単に真似できるものではなく、まさにプロフェッショナルの仕事だと感じました。それは、今回掲載されているどの記事からも伝わってくると思います。

八王子の発展を長きに渡り支えてきた伝統は、それを築いた方々の、その技術への愛着と誇り、そしてそれを守り続けていく芯の強さの賜物たまものです。

今回の取材を通して、単に歴史的な事実を知るだけでなく、それを築き、受け継いできた方々の物語、それぞれの人生に刻まれた想いの深さ、そしてものづくりに情熱を注ぐ姿の尊さを感じました。伝統とは過去のものではなく、現在進行形でもあり、未来につながっていくものでもあるということを、今回のミコタマ9号を通して読者の皆様感じていただけたら幸いです。（彦坂菜々子）



帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(万葉集)

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を(防人に赴任する夫に)歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。



令和6年度
文化庁 Innovate MUSEUM 事業



帝京大学総合博物館 TUM
Teikyo University Museum